
日常習慣『停止。』

森秋緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常習慣『停止。』

【Nコード】

N0313Z

【作者名】

森秋緋色

【あらすじ】

突然、自分の周りが『停止』するようになった瀬野裕史。一日に一度だけの、不思議極まりない日課を否応なしに課せられた彼は、日々の生活の中で段々と『停止』を身につけていく。

圧倒的なものを経験すると人はそれに黙って従うものだ。という一人のサラリーマンが体験するタイムストップ。

1・瀬野裕史の『停止。』（前書き）

久々になってしまった投稿です。今回は書いていこうと思う小説のさわりですが、どんどん投稿していこうと思います。読んで素直に思ったことなどコメントもらえると嬉しいです。

それでは、今後ともよろしく願います。

1・瀬野裕史の『停止。』

全ては時の支配下である。人も猫も、海も、森も、空も、星や宇宙でさえ、時という圧倒的な存在の前には、逆らうことは許されない。いや、そもそも時に逆らう術を持たない。どの存在も。例えば神様であつても、その大いなる進行を妨げることはできない。

ところが時にまた、可笑しな、全くもって不可思議極まりない経験をするものもいる。

それが私、瀬野裕史だ。

私はある時から、『停止』をするようになった。本意ではない。一日に一度のある決められた条件下で、私は私の周り、つまりは世界全体の時間が止まるようになった。この出来事は私以外は認識することができない。と思う。風や水の自然体もその動きは『停止』し、たまに見事なまでの芸術を見せる。

さて、私がこうなった原因。困ったことに、私にもさっぱり解らない。最初はあまりに突然で、止まった時間も短かったため、気づくことは無かった。それが段々と止まる時間が長くなっていき、三秒も止まる頃になったとき漸く世界が『停止』していることに気が付いた。第一に私が発した言葉はこうだ。

「……………えっ」

なんとも情けない反応である。男としてそんなことでいいのかと罵倒したい人もいると思うが、当たり前と言えばそうだ。世界が『停止』するなんて、常軌を逸した現象を誰が体験するだろうか。息を飲むことができただけでも十分である。

そういつわけだから。私の周りは、その日から『停止』の日課を
否が応でも実行されることになった。

1・瀬野裕史の『停止。』（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

2・シュークリーム

私がここ一週間、仕事そっちのけで調べ上げた結果。この現象のトリガーとなっているのは間違いなく私のクセであることがわかった。

私は考え事をするとき、中指で三回リズムを取るクセがある。――

――ミュージシャンでもない私がなぜこんなクセをつけているのか、私にもわからない――そして、時計が鐘を打つとき、つまりは六時〇〇分や十時〇〇分のように長針が〇の位置にあるときにこのリズムを取ると『停止』の現象が起きる。これを発見したときは流石に訝えているなと思った私だが、肝心の『原因』について、何一つ解決していないのもまた事実である。

それからもう一つ。『停止』の時間が延びているはずだということ。『停止』の現象が起きた際、私の周りの時は止まるが、私が触れているものに関しては時の断片から解放されるようである。しかし、時を計るもの、例えば時計などは、こいつらも時の住人であるが故の態度なのか、針は止まってしまいうらしい。時が止まれば針も止まる。当然な態度である。

そんなわけで『停止』中は時を計れない。元々三秒くらいだったのが、私の体感では数秒ずつ延びているであろうと結論付けた。いや絶対延びているはずである。

さて、私が『停止』という――この名前もあれこれ考えたが、最終的に面倒になって分かりやすくこう名付けた。――

――奇々怪々な現象を一週間観察した結果、こういう成果を見出

したわけだが、原因を突き止めるにはどうしたらよいものか本当に悩む。できれば元の生活に戻してほしいが、如何せん時が止まるからといって不便の一つもないのが一番問題だ。「迷惑でもないし、このままでいいか」というメンタルが働いて原因追究にこの私の脳みそが考えるのを放棄するのだ。単純には、何か不便になるようなもの或いは事象があればよいのだ。

朝。私は会社に着くなり時計を確認する。七時四十五分だった。あと十五分で、私は時を止める術を持つことができる。まあ、止めた所でどうするかということになるのだが。

「瀬野^{せの}さん、おはようございます。これどうぞ」

今日の仕事のことを考えようとしていた私に、同じ部署でよく会話を^{かたひら}する片平^{かたひら} 悠里^{ゆうり}があいさつをした。かと思うと、ごく自然に、コーヒーでも淹れてきたよう顔で、私のデスクにシュークリームを置いた。紙素材の包装紙に包まれたちよつと高そうなシュークリームだった。

「おはよう片平さん、これは何かな？」

私は教師が教え子に問い質すかのように聞く。
「デブの元です！」

嫌な言い方をする女である。朝からヘビーなデザートを見せられた私は、とりあえずため息をつきつつ、置かれていたシュークリームを手に取り、お店の名前がデザインされたプリント見てからもう一度言った。

「これは何かな？」

「だから、デブの元ですよ」

懲りずに同じ回答をする片平さん、無邪気、天然、意味不明なのが彼女のモットーである。

「それは聞いた。僕が聞きたいのは、どうして僕の机の上にシュークリームを置いたのかということなんだけど」

断固としてデブの元とは言わずにそう言つと、片平さんは私の耳元に顔を寄せ、「ちよつとは太らないと」と囁いた。

「失礼な！」

私は当然に怒った。それは私がもやしの様だと言つてると同じである。自慢ではないが、運動は結構できる。筋肉もあるし、流行りの細マツチョというやつだ。

「瀬野さん華奢に見えるから、横に伸ばしたらどうかなー、なんててへへと笑つて見せる片平さん。どんな思考回路をしているのか、私にはさっぱり理解ができない。他の女の子の会話は話が良く見えて話しやすいのに、片平さんの話だけは本当につかめない。今朝のニュースの話をしたところに同じ部署の友達の恋愛話を持ち込んだり、全くもって支離滅裂なのである。

なので私は彼女と話す時は、常に無難さを目指して会話をする。

「まあ、そんなことより、この店のシュークリームとってもおいしいんですよ。外は少しサクツとしてて、中身はダブルクリームなんです。最高ですよね」

そんなことを無邪気に言うので、私は取りあえず。

「へえ、それはおいしそうだろーね」

無難にそう答えて、最高のシュークリームをどう処理したものかと考えることにした。

「お、なんだよ裕史^{ゆうし}、朝っぱらからお菓子ですかい？」

ここでまた面倒な会話を広げたのは、同僚で一番仲の、いや、扱いやすい西谷^{にしに}孝^{こう}だった。相変わらず、朝からなにが楽しいのか機嫌よく絡んでくる。こいつはいつもこうだ。どの人にも、悩みなんて一つも見せない振り方をしている。

「これは片平さんからの貰いものだ」

私はきっぱりそう言った。片平さんかというと、先ほどまで一緒

に話していたはずなのに、今度は何か考えた様子で視線を空中へ向けていた。理解ができなかった。

「いいなあ、その店のシュークリーム美味いんだよなあ、俺にもちようだい」

「——あ、でも瀬野さんの分しかないの」

まるで小遣いでも強請るかの様に手のひらを片平さんに向ける西谷。片平さんははっとした表情のあと申し訳なさにそう断った。時刻、七時五十五分。

「なんだ、残念」

西谷は気にしてない素振りであっさりそう言くと、私の隣にある自分のデスクに座り直し、仕事の準備を始めた。片平さんも「では、仕事頑張ってくださいね」と他人事のようにそう言って陣地へと戻っていった。私は振り回され損をした気分で、もう一度シュークリームに目をやる。

「食いたいなら食うか？」

「お、食う食う」

あまり興味無さそうだったが、処理に困っていたために一応聞いてみるとこれまたあっさりと答えた。言ってみるものである。ほら、と彼のデスクの上にシュークリームを置くと、彼はさっそく食べようと手を伸ばした。

「あ、ちよつとまで」

どうせなら少し遊んでやろうと思った私は、包装紙を解いて今にもかぶりつきそうな彼に食べるのを止めさせた。

「なんだ？返さないぞ」

「違う、僕がいいと言っまで食べるな」

「俺は犬か！」

「近いんじゃないか？」

なんとなくこいつが食い付いてきそうな言葉を並べつつ、時間を見ながら“止める”準備をした。

——そして。

「わかった。お前も食いたいつてことだな！半分わけてやる」
時刻、七時五十九分。

「いらん。僕がいつそんなことを言っただ」

「じゃあなんでそんなこと言っただよ、本当はほしくせに」

——五。

「はいはい、じゃあもう食べていいぞ」

——三。

「お、じゃあ」

——一。

「力ちつとな」

合図ではないが時計に真似て擬音を発し、指で三つリズムを刻む。

「.....」

無音。静寂。——『停止』。

「.....」

私は言葉を無くしていた。無論、『停止』についてではない、こんなのはもう慣れた。私の目線の先。西谷の手に収まるシュークリームについて、だ。

「.....??」

見れば見る程わからない。シュークリームは確か茶色の生地、包装紙は淡い黄色だったはず。の、そのシュークリームは今チエツカ―色（白と黒の格子状でチェス盤の色がまさにそうである。）を露わにしている。

「なんだよこれ」

巷のショッピングモールで見ればお洒落に見えるかもしれないこの色も、今はなんだか不気味で、これを食べようとしている西谷の顔は、笑みに満たされている。それもまた、不気味に思えた。

こんなことは初めてである。外で噴水を止めたときも、夕空を止

めたときも、こんな不気味なチェッカー色は目にしなかった。

「・・・・・・・・このシュークリームだけか」

周りも見てみるが、異常なのはこの最高のシュークリームだけ。
考えてみるが、当然ながら全く分らない。

「・・・・・・・・あーん」

毎度のことながらぶわつと元に戻ると、私は驚く暇もなく西谷のシュークリームを叩き落した。

「いってえな、急になにすんだよ！」

おいしそうなシュークリームを食べようとしていた西谷は当然怒り、叩かれた手をさすった。西谷の手から落ちたシュークリームは、床の上にべしゃりと潰れていた。

「・・・・・・・・」

気のせいかもしれないが、後ろから舌打ちのような音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0313z/>

日常習慣『停止。』

2011年12月9日06時56分発行